

本時の学習指導計画		過程		評価の規準と 評価方法
導入	展開	指導内容	指導者	
<p>詩の朗読</p> <p>指名朗読</p>	<p>一、内容把握</p> <p>語句の意味について再確認する。</p> <p>方言部分(あめゆじゅ...)の持つ意味と繰り返しの効果を考えさせる。</p> <p>ローマ字で表現した理由を考えさせる。</p>	<p>詩の内容に即して発表する。</p> <p>標準語で置き換えた表現と比べてみる。</p> <p>ローマ字部分の意味を考えてみる</p> <p>二人の宗教観について理解する。</p>	<p>指 導 者</p> <p>学 習 者</p> <p>学 活</p> <p>学 習 者</p>	<p>大きな声で落ち着いた読んでいるか。</p> <p>人の朗読をしっかりと聞く態度が出来ているか。</p> <p>作者の心情に即して意味を把握しているか。</p> <p>方言でなければ表現できないことを考えられたか。</p> <p>この部分を聞いたであろう賢治の心情を考えられたか。</p> <p>資料を適切に活用したか。</p>
<p>まとめ</p> <p>三 鑑賞文</p>	<p>二、主題把握</p> <p>賢治とトシの心の繋がりについて確認する</p>	<p>賢治とトシの心情とこの詩の持つイメージについてノートにまとめさせる。</p>		<p>評価の規準と 評価方法</p> <p>次時に発表させる。</p>

「教えて賢さん」

今回の国語の授業で「宮澤賢治」先生の「永訣の朝」を学習する
ことになりましたが、私達の住む岩手県花巻出身の賢治先生について
分からないことが多いので、思い切って賢治先生に直接お聞きし
ようと考えました。賢治先生が何を考え、何を求めて生きていたの
か、賢治先生の言葉で話してもらいました。

賢 ○ 賢治先生初めまして、こんにちは。今日は賢治先生に聞きた
いことがあって来ました。よろしくお願ひします。
賢 「こんにちは、よくおいでになりました。今日は若い方とお話
が出来るので、楽しみです。それから、先生はやめて下さい、
賢さん」とでも呼んで下さい。」

賢 ○ それじゃ、失礼して賢さん、順を追ってお聞きします。まず
子供時代はどんな様子だったのですか？
賢 「そうですね、まず私が生まれたのは花巻だ、と言うことは知っ
ているでしょう。当時は豊次町と言っていたのですが、古着屋
と質屋をしていた家に生まれたのです。今から思うと相当裕福
な家だったようですね。長男として親の期待は大きかったと思
いますよ。」

賢 ○ 賢さんは、後に家業を継ぐのを嫌っていますよね。それから
お父さんともずいぶんけんかをしたりしている。それはいつ頃
からなんですか？
賢 「けんか、と言うものではないのですが、これは、一つには父
の性格というものが、私が幼い頃、赤痢にかかった時、父にも
伝染してしまって、それ以来父はずっと胃腸を悪くしたんです。
また、私が鼻の手術で入院した時に発疹チフスにかかって、そ
れがやはり看病していた父に移ってしまっていて、それから何か
ある度にこれらのことを言うもんだから、いい加減にしてもら
いたいと思ったこともありました。」

賢 ○ そんなことがあったんですか。でもそれって賢さんのせい
ではないですよね。
賢 「でもやはり一番は、宗教のことかな。私の家はすつと浄土真
宗だったのだけれど、高等農林時代ごろから「法華教」に傾倒
していった。今思うと岩手の至りで和子かしいのですが、父に
改宗を説いたこともあるんだよ。「お父さんは間違っているよ
す。法華経を讀んで改宗して下さい」なんてね。」

賢 ○ 「へえー、意外だね！賢さんにそんな一面があったなんて」
「皆から大人しいと思われているけど、そうでもないんだな。
家業についてだけれど、当時東北は天候不順で作物も取れな
かったんだ。それで貧乏だった私の家に生活に困った農家の人た
ちが大勢やってきては、お金を借りていくんだ。べこべこ頭を
下げては帰っていく姿を見ていると、而しては言え何だか因果
な気がして、悲しくなってきたんだ。それに法華経の教えと、困っ
ている人たを相手に利を得る質屋がどうも矛盾するよう
な気がしたんだなあ。」

賢 ○ 中学校生活について
賢 「どころで、賢さんはずいぶん勉強が出来たようですね。ど
んな勉強したんですか。僕なんかこの前の期末試験さんざんな成
績で、先生に注意されるのは、親に叱教されたのが大室でした。」
賢 「私も、小学校では出来たのかも知れないな。成績は全甲と言
って、今で言う「オール5」だった。それで成績優秀者に選ば
れて褒美をもらったのだけれど、何だと思おう？「教科書」さ。」

賢 ○ 「でもね、盛岡中学校、と言っても今の中学校じゃなく、今
で言えば盛岡一高って言うんださうだけれど、その中学校に進学
した時は本当に勉強しなかったなあ。」
賢 「でも、そのころの中学校って今と違って勉強できる人しか行
けなかったんじゃないですか？」

賢 ○ 「どんなに勉強できても経済的に余裕がないと進学は出来な
かっただけだ。たんだよ。そういう意味で私は嫌っていた家業の
おかげで進学できたんだ。」
賢 「複雑ですね。」

賢 ○ 「あこがれていた中学校に入學でき、寮に入って友達も出来た
し、楽しい学校生活だったよ。そうそう初めて海を見て感動した
のも、三年の修学旅行で石巻に行った時だったな。運動は全然
だめで体育の時間はいつも先生にじめられていたなあ。でも
初めて若手山に登って感動したのもこの頃で、若手山には生涯
で百回以上登ったなあ。鉱物や植物採集に熱中したり、短歌も
作ったりして、短歌と書えは若手山を代表する歌人の石川
啄木も盛岡中学校の同窓生だよ。」

賢 ○ 「やはらかに、柳青める北上の、岸辺目に見ゆ 泣けと如くに
の啄木ですね、教科書でやりました。」
賢 「そう、よく知っていますね。でも三年生あたりからかな、先生
に対して反抗的な態度を取ったりして、勉強も怠け始めたのは。」

賢 ○ 「賢さんが、先生に反抗したんですか？」
賢 「そうですね。言ったじゃないか、私は決して優等生タイプじゃな
いんだよ。四年生の父兄懇話会、今で言えば三者面談って言うの
かな、その時も成績不良で注意されているし、五年生の時にも成
績不振で注意書をもらっているんだ。友達とあざけられたり、授
業をさぼったり、実行も悪かったし、全然勉強もしなかったんで、
落ちこぼれさ。最終学年の五年生の二学期の成績は平均点六十
一点で、九十一人中七十七番だったよ。それに比べたら、妹のトシ
はずいぶん、小学校からずつと一番の成績で、花巻高等女学校で
は平均点九十八点という記録を作り、模範生表彰を受けているん
だよ。」

賢 ○ 「僕が考えていた賢さんのイメージが変わったなあ。何だか賢さ
んが身近な人に見えるようになった。だって賢さんみたいなタイプ
の友人が三高にもいるもの、連れてきた反抗期ってやつですか？」
賢 「ああ、今となってはそうなのかも知れないね。親や教師に対す
る反発や、時々みんなを驚かせるような事や、思い切った事をや
つてみたり。でも若い時ってそんな時期でもあるんだと思うよ。
君達はどうですか？」

賢 ○ 高等農林時代について
賢 ○ 「賢さんの思いがけない中学校生活にびっくりしたけど、高等農
林時代の賢さんはどうだったんですか？」
賢 「中学校を卒業してすぐ高等農林に入學したわけではないんだ。
父も中学校を出たら家業を継がせたいと言っていて一人だ社会に出
て何かできるわけでもないし、将来に対する目的も見出せない間々
とした時期だったな。それに個人的に辛いこともいろいろあった
し。その事については又いつかお話ししよう。」

賢 ○ 「まあ、そんなこんなでぶらぶらしていた私を、父はやっぱり心
配してくれたらうと思いましたが、とうとう高等農林学校への進学を
認めてくれたのですよ。いやー嬉しかったです。学校へ行くば
今の生活や自分自身が変わると思っただけで、まず家を離れること
がね。」

賢 ○ 「高等農林学校は確か今の岩手大学ですよ。」
賢 「そうですね。岩手大学農学部の前身で、日本最初の農学の専門学
校だったんだ。」
賢 「この年に、トシさんも東京の日本女子大学に入學していますよ
ね。」

賢 ○ 「私もトシもこの年に花巻の家を出て、盛岡と東京に別れたので
すが、しかしこの事が逆に二人の間を深く結びつけたのです。東
京のトシからは週に一度は手紙が来ましたし、直接逢わない分、
相手のことを思う気持ちが深まったのかも知れません。」

賢 ○ 「まず、全国から来た多くの友との出会いがありました。中学校
時代とは違って勉強も頑張りましたよ。何か自分が変わっていく
ような気がしましたね。」

賢 ○ その頃の毎日の生活は、月曜日には北山の報恩寺の座禅に参加
し、それ以外の日も朝早く起きてお経を唱え、休みの日にはリュ
ックの中に地図やコンパス、星座表、ハンマーを入れてあちこち
の山や野原を歩き回り、一日の終わりに、短歌で日記を書いた
り、とまあこんな調子でした。」

賢 ○ 勉強では地質学や土壌学などに興味を持ちました。野山を歩い
ては自分なりに地質や土壌について調べたわけですが、しかし後
から思うと、この自然との触れ合いが学問だけではなく、私の精
神に大きな影響を与えてくれたように思うのですよ。」

賢 ○ 「賢さんの童話や詩は、山や河や野原などの自然を舞台に描かれ
ています。そう言うことですか？」
賢 「それもありませんが、私にとって、自然と宗教と化学は相反する
ものではなく、溶け合った一つのもの、として感じられたと言
うことです。上手く言えばませんが、一人て野山を歩いていると、自
然の中に化学があり、宗教があり、そして科学と宗教も又実は同
じものではないか、とこう思えてくるのですよ。そしてそれらが
渾然一体となった宇宙世界、銀河世界の中に我々は生きているの
だ、というような事を感じたわけですよ。」

賢 ○ 「いい匂いのする野原を歩いている時や、右に腰掛けて汗を拭い
ている時、澄み切った秋風がススキの穂っぱを運んでいく時、月
夜の晩に困ってしまった野原をキックキックと音を立てながら歩
いている時、なんだか嬉しいような、泣きたいような憂な気持ちに
なりましたね。」

賢 ○ 「なんだか嬉しいですね。でも何となく分かるような気もします
が、今は、分からなくてもいいですよ。けれどもいつか君達にも分
かる時がくるでしょうから。」

賢 ○ 「賢さんが、先生に反抗したんですか？」
賢 「そうですね。言ったじゃないか、私は決して優等生タイプじゃな
いんだよ。四年生の父兄懇話会、今で言えば三者面談って言うの
かな、その時も成績不良で注意されているし、五年生の時にも成
績不振で注意書をもらっているんだ。友達とあざけられたり、授
業をさぼったり、実行も悪かったし、全然勉強もしなかったんで、
落ちこぼれさ。最終学年の五年生の二学期の成績は平均点六十
一点で、九十一人中七十七番だったよ。それに比べたら、妹のトシ
はずいぶん、小学校からずつと一番の成績で、花巻高等女学校で
は平均点九十八点という記録を作り、模範生表彰を受けているん
だよ。」

賢 ○ 「僕が考えていた賢さんのイメージが変わったなあ。何だか賢さ
んが身近な人に見えるようになった。だって賢さんみたいなタイプ
の友人が三高にもいるもの、連れてきた反抗期ってやつですか？」
賢 「ああ、今となってはそうなのかも知れないね。親や教師に対す
る反発や、時々みんなを驚かせるような事や、思い切った事をや
つてみたり。でも若い時ってそんな時期でもあるんだと思うよ。
君達はどうですか？」

賢 ○ 高等農林時代について
賢 ○ 「賢さんの思いがけない中学校生活にびっくりしたけど、高等農
林時代の賢さんはどうだったんですか？」
賢 「中学校を卒業してすぐ高等農林に入學したわけではないんだ。
父も中学校を出たら家業を継がせたいと言っていて一人だ社会に出
て何かできるわけでもないし、将来に対する目的も見出せない間々
とした時期だったな。それに個人的に辛いこともいろいろあった
し。その事については又いつかお話ししよう。」

賢 ○ 「まあ、そんなこんなでぶらぶらしていた私を、父はやっぱり心
配してくれたらうと思いましたが、とうとう高等農林学校への進学を
認めてくれたのですよ。いやー嬉しかったです。学校へ行くば
今の生活や自分自身が変わると思っただけで、まず家を離れること
がね。」

賢 ○ 「高等農林学校は確か今の岩手大学ですよ。」
賢 「そうですね。岩手大学農学部の前身で、日本最初の農学の専門学
校だったんだ。」
賢 「この年に、トシさんも東京の日本女子大学に入學していますよ
ね。」

賢 ○ 「私もトシもこの年に花巻の家を出て、盛岡と東京に別れたので
すが、しかしこの事が逆に二人の間を深く結びつけたのです。東
京のトシからは週に一度は手紙が来ましたし、直接逢わない分、
相手のことを思う気持ちが深まったのかも知れません。」

「何をしても良い時間さ。友達とおしゃべりしても良いし、本を読んでも良いし、疲れている子は寝ても良いんだ。中には空に浮かんでいる雲を見て、いろいろな空想していた手もいたなあ。」

「ゆどりの時間ってわけか。うらやましいなあ。でもさっきから聞いている。余り勉強のことは話されていませんね。試験なんかがどうだったんですか？」

「そりやきちんとやつてたよ。私はね、試験範囲は全部教えていたんだよ。何処何処を出すよって。」

「えっ、そんなのありですか？」

「その代わり、教科書の丸暗記やどうしようもない、応用問題さ。授業をきちんと聞いていれば全部解ける問題ばかりだけだね。」

「ああ僕も賢さんみたいな先生に習いたかったなあ。」

一人の農民になる

賢 ○ 「そんなに楽しかった農学校の先生を、なぜ辞めたのですか？」

賢 ○ 「一言で言うと、自分のしていることや言っていることが、本物じゃないってことに気が付いたからさ。」

賢 ○ 「本物じゃない？」

賢 ○ 「生徒達には農業の重要性や、働くことの意味を話していても、結局私は口先だけで、自分の手を汚してはいなかったのです。自分自身が農業に飛び込まなければだめだと気が付いたので。」

賢 ○ 「やっぱ賢さんは自分にも厳しい人なんですね。でもどうやって農業に就いたのですか。畑とか田圃とかは？」

賢 ○ 「今回は誰の手も借りずに自分一人の手で農業をやってみたくて思っただけさ。だからまず田圃から始めたよ。木を切つて、草を刈り、大きな石も取り除いて、少しずつ、少しずつ。」

賢 ○ 「周りの人の反応はどうだったんですか？」

賢 ○ 「家族は勿論反対さ。もともと丈夫な体じゃなかったからね。農家の人たちは『あんな手でも何ができるもんか』と思つていたと思うよ。でも仕事は辛い、精神は充実していった。」

賢 ○ 「『難関地人協』って聞いたことがありますが、どんな協会なんですか。確か『下ノ畑二階リマス 賢治』っていう看板が入り口にあつたような気がするんですが。」

賢 ○ 「豊かな農民の生活を作ろうとしたのです。それまでの農業と言えど、暗くて、非科学的だったような気がするんです。でも本来農業とはもっと自由で、もっと明るいものであるはずだと考えたのです。それで近所の農家の方や若者達との交流や勉強会、時には音楽会や灯台会を開いたりしました。」

賢 ○ 「また各地に無料の肥料設計事務所を開いて肥料の設計書を書いたりもしましたよ。二千枚以上の設計書を書いたはずですよ。」

賢 ○ 「全部ただですか。」

賢 ○ 「勿論、ただ昭和に入ると東北地方は冷夏と日照りに襲われ、稲や野菜が不作だったのです。せつかく私の肥料設計書を信じてくれた人たちのために必死に駆け回つたのですが、やっぱりだめでした。新しい品種の稲を薦めたものの、やっぱり不作で、本当に責任を感じました。みんなには悪いことをしました。」

賢 ○ 「天候不順は賢さんのせいじゃないでしょうか。それにこのころの不作は大規模なもので、他のところではもっと悲惨だったって聞きましたよ。なぜそんなに自分ばかり責めるんですか？」

賢 ○ 「みんなが私を信用してくれたことに報いることができなかったからですよ。結局『難関地人協』もいろいろあることがあつて残念な結果になってしまいました。そしてこのあたりからずいぶん体調が悪くなって来たんです。」

賢 ○ 「だって賢さんはろくに栄養のある物食べていなかったそうじゃないですか？」

賢 ○ 「それでも食べられるだけ寄せです。この不作続きで、東北では若い娘さん達の人身売買まで起こつていたのですから。」

賢 ○ 「ああ、社会の教科書だったか、資料だったかで見ることがあります。確か道野の子供達が生の大根をかじつて、写真と、地方では人身売買も行われていたって書いてありました。」

賢 ○ 「そんな時代でしたね。悲しい時代でした。」

賢 ○ 「ああ、今日はすいぶんお話をしてくれてしまいました。」

賢 ○ 「もうこんな時間ですか。いろいろなお話をお聞きしてついでに間の縫つのを忘れていました。すみませんでした。夜れているところを無理にお暇いしてしまつて。」

賢 ○ 「いえいえ、いいのです。私の方こそ本当に楽しい時間でした。是非又おいで下さい。今度は今日言えなかつたことなどもお話しして差し上げましょう。今日はほんとにありがとうございます。」

賢 ○ 「こちらこそ、ありがとうございます。お体の具合を早く治して下さい。近い内に又おじやまします。」

こうして、僕と賢さんのお話は終わりました。最後の方は賢さんも少し疲れていたので、心配です。でも、今まで分からなかつたことを、直接賢さんから聞くことができた本当に良かったと思えます。又近い内に訪ねてみようと思つて心に決めました。

昭和七年、賢治の病状は一進一退を繰り返して、気分の良い日は俳句を作つたり、肥料相談を受けたりしていた。

昭和八年、九月十七日から奥谷ヶ崎神社の祭礼があり、表に出て御輿の渡御を拝礼するが、この冷気にあつたことで再び発熱する。二十日、農民が肥料相談のことで訪れた。家族は反対したが、賢治はせつかく来てくれたのだから、と服を着替えて一時間あまり正座して相談のつたという。しかしこの直後病態は悪化し、高熱を出した。急性肺炎であった。この高熱の中父と信仰についての話をし、その夜は弟清六と共に寝る。

翌二十一日、死を覚悟した賢治は床に起きあがり正座して、『南無妙法蓮華經』の経を唱えた。その後喉立し、容態が急変する。父に『国訳妙法蓮華經』千部を作り、友人知己に分けるよう依頼した。この際父が賢治の書いた原稿について触れると、『みな自分の心の迷いのあとですから、良いようにして下さい』と答え、父から『立派だ』と誉められる。賢治は清六に『初めてお父さんに誉められたものな』と嬉しそうに話している。その後家族が部屋から離れ、賢治は母イチチからもらった木をおいしそりに飲み、枕元からオキシフルをふくませた消毒綿を取り、首、手、体を拭き『ああ、いい気持ちだ。』と云つて胃もなく、ぼろりと消毒綿を落とした。

昭和八年九月二十一日 午後一時三十分

官澤 賢治 死去 (享年 三十七才)

世界がぜんたい幸福にならないうちは 個人の幸福はあり得ない